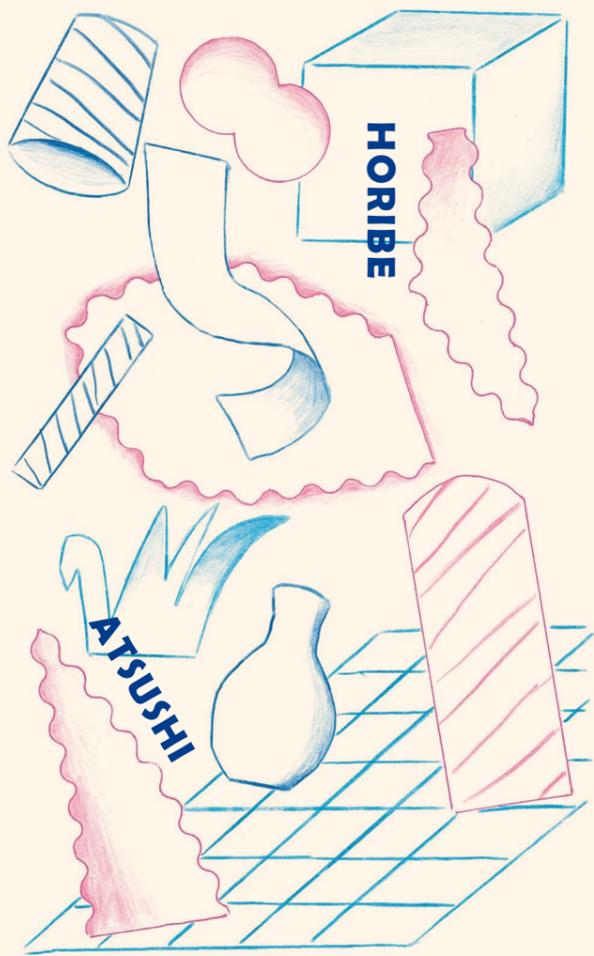


SELFBUILD



BOOKLIST

「セルフビルド」にまつわるブックリスト

選・文: 堀部篤史 (誠光社)

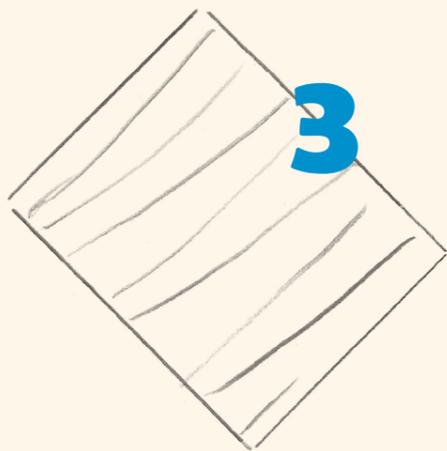
illustration by ASARU



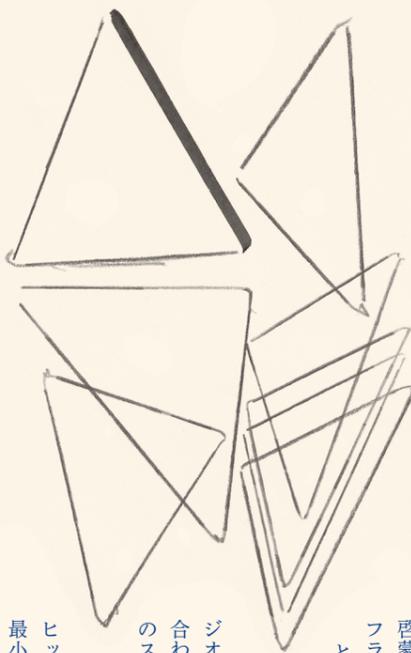
『タラブックス
インドのちいさな出版社、
まっすぐに本をつくる』

南インドチェンナイの出版社、タラブックス。多様な職人たちが協働し、編集や販売のみならず、ハンドメイドのシルクスクリーン印刷から製本までを社内で行う。異色の活動で知られている。かつてインドの出版業界では注目されなかった、民俗画家たちを著者に起用し、職人たちが多様なカーストの人間を雇用、出版物は世界的に流通し人気を博す。まさにこの出版社自体が、インド社会の過去と現在の縮図でもある。印刷どころかデザイナーや編集者までもがアウトソーシングが当たり前の日本の出版業界と比較してみると、ウィリアム・モリスのごとく書籍を建築物に重ねるならば、これこそがまさにセルフビルド。

野瀬奈津子 松岡宏大 矢萩多聞 著、2017、玄光社



『コズモグラフィ』



建築やデザインにとどまらず、思想、経済、社会とマクロな視点で多岐にわたる啓蒙活動を展開したバックミンスター・フラウ。自身提唱した「宇宙船地球号」という言葉に集約されるように、有限の世界の中で持続可能な調和を求めるといったテーマは彼の建築物にも反映されている。ジオデシック・ドームは、三角形の組み合わせにより、最小限の資材で、最大限のスペースを覆うことが出来るという、それ自体がデザインであり、思想でもあるというもの。その発想はヒッピー世代に受け継がれた。野外でも最小限の道具で簡単に組み立てられ、移築も容易であることは、土地に縛られない生き方を現代も刺激し続けている。

1

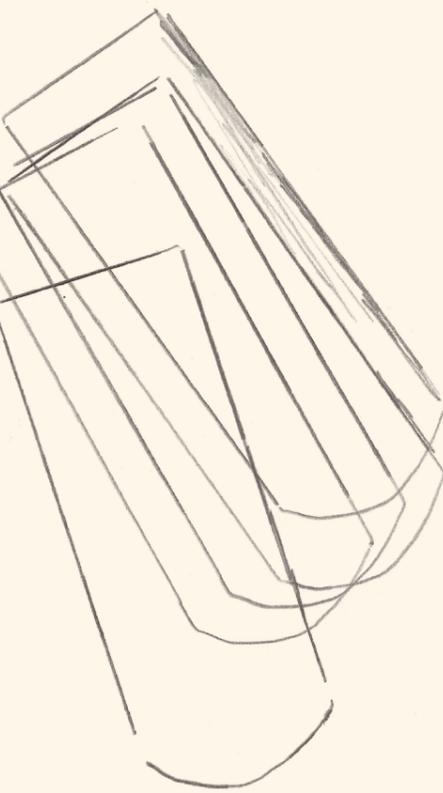
R・バックミンスター・フラウ著、梶川泰司 訳、2007、白揚社

4

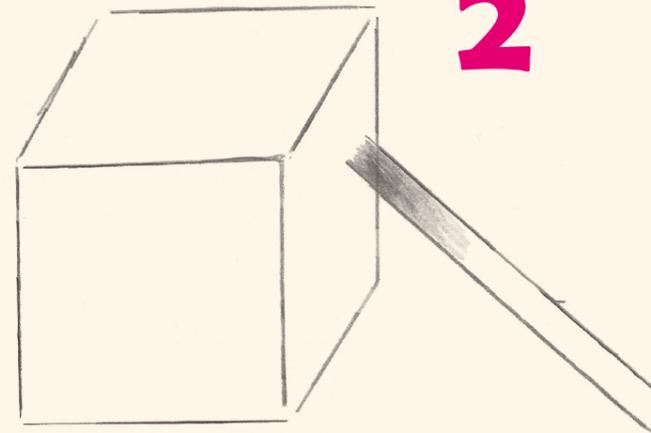
『方丈記』(古典新訳文庫)

鴨長明 著、蜂飼耳 訳、2018、光文社

平安から鎌倉にかけての、歌人、随筆家として知られる鴨長明。さまざまな役職に就任寸前で出世の道を閉ざされたことから厭世的になり、都の周縁に移り住み隠居暮らしを始める。前半では自然災害や火事などが多発した時代に立派な家など持つよりも身軽に暮らすべきだという物理的な理由が綴られるが、その根本には、出世や成功欲など現世利益への猜疑心がある。そこからドロップ・アウトしてあえて都を見渡せる程度の距離に住むあたりが面白い。簡単に組み立て、分解が可能で、移動式になっている方丈庵はモバイルハウスの先駆け。土地に縛られない生き方をするには、まず住まいの設計を考えることが重要である。現在では京都下鴨神社摂社の河合神社内にレプリカが設置されている。



2



『STUDIO MUMBAI: Praxis』

ジジョイ・ジェイン+ジョセフ・ファン・デル・ステーン 監修、2012、TOTO出版

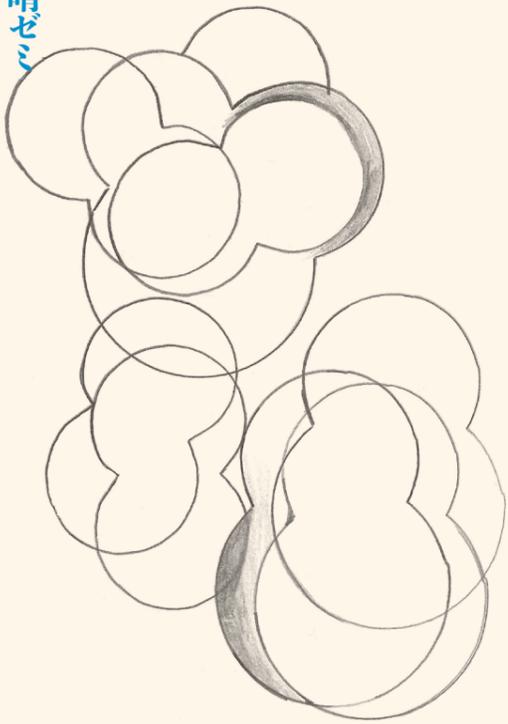
施工業者を使わずギルドのような形で、大工や石工、技術者と協働し、細部も含めトータルで建築物を作る、インドの「スタジオ・ムンバイ」。本書の中で協働建築家のサミュエル・パークレーは『ヒンジやハンドルなどの小さなものや、外装材や構造にいたるまですべてです。私たちにあってそれは、ここに留まる非常に魅力的な理由の一つです。欧米、少なくとも私がいた国では、建築図面は指示書や法的書類の様相に成り下がってしまっています。施工業者、施主、建築家がそれぞれ相容れない立場をとります』と語ります。自分たちの労働が生むものの総体すら知ることの出来ない高度資本主義において、消費ではなく協働でトータルに建築物をつくることの喜びをこのスタジオは教えてくれる。

- 12 『バルセロナのガウディ建築案内』(コロナ・ブックス)、丹下敏明 著、2014、平凡社
- 13 『クリティカル・パス』、R・バックミンスター・フラウ 著、梶川泰司 訳、2007、白揚社
- 14 『野生の思考』、クロード・レヴィ=ストロース 著、大橋保夫 訳、1976、みすず書房
- 15 『バベル! 自力でビルを建てる男』、岡啓輔 著、2018、筑摩書房
- 16 『家を せおって 歩いた』、村上慧 著、2017、夕書房
- 17 『クラフツマン』、リチャード・セネット 著、高橋勇夫 訳、2016、筑摩書房
- 18 『驚嘆!セルフビルド建築 沢田マンションの冒険』(ちくま文庫)、加賀谷哲朗 著、2015、筑摩書房
- 19 『田舎のパン屋が見つけた「腐る経済」タルマーリー発、新しい働き方と暮らし』(講談社+α文庫)、渡邊格 著、2017、講談社
- 20 『ぼくはお金を使わずに生きることにした』、マーク・ボイル 著、吉田奈緒子 訳、2011、紀伊國屋書店
- 21 『就職しないで生きるには』、レイモンド・マンゴー 著、中山容 訳、1998、晶文社
- 22 『就職しないで生きるには21』(明日から出版社)、島田潤一郎 著、2014、晶文社
- 23 『ツリーハウスをつくる』、ピーター・ネルソン 著、日本ツリーハウス協会 監訳、2005、二見書房
- 24 『ツリーハウスで遊ぶ』、ポーラ・ヘンダーソン&アダム・モーネメント 著、日本ツリーハウス協会&柳田亜細亜 訳、2006、二見書房
- 25 SD選書226『ウィリアム・モリス 近代デザインの原点』藤田治彦 著、1996、鹿島出版会
- 26 大人の本棚『ウィリアム・モリス通信』、小野二郎 著、川端康雄 編、2012、みすず書房
- 27 『マイクロシェルター 自分で作れる快適な小屋、ツリーハウス、トレーラーハウス』、Derek Diedricksen 著、金井哲夫 訳、2017、オライリー・ジャパン
- 28 『ナチュラル・ナビゲーション 道具を使わずに旅をする方法』、トリスタン・グリー 著、屋代道子 訳、2013、紀伊國屋書店
- 29 ワールド・ムック310『小屋の力』、河村喜代子、今井今朝春 構成、2001、ワールドフォトプレス
- 30 『地球の上に生きる』、アリア・ベイ=ローレル 著、深町真理子 訳、1972、草思社
- 31 『カワイイヨリガミ細工』、COCHAE 著、2016、誠文堂新光社
- 32 『舟をつくる』、関野吉晴 監修・写真、前田次郎 文、2013、徳間書店
- 33 『パーマカルチャー 農的暮らしの永久デザイン』、ビル・モリソン/レニー・ミア・スレイ 著、田口恒夫/小祝慶子 訳、1993、農文協
- 34 『発酵の技法 世界の発酵食品と発酵文化の探求』、サンダー・エリックス・キヤッツ 著、水原文 訳、2016、オライリー・ジャパン
- 35 『SAMORÓBKA (MALE INSTRUMENTY)』、Paweł Romańczuk 著、2013、Fundacja Mate Instrumenty

5

『関野吉晴ゼミ カレーライスを一から作る』

前田亜紀著、2017、ポプラ社



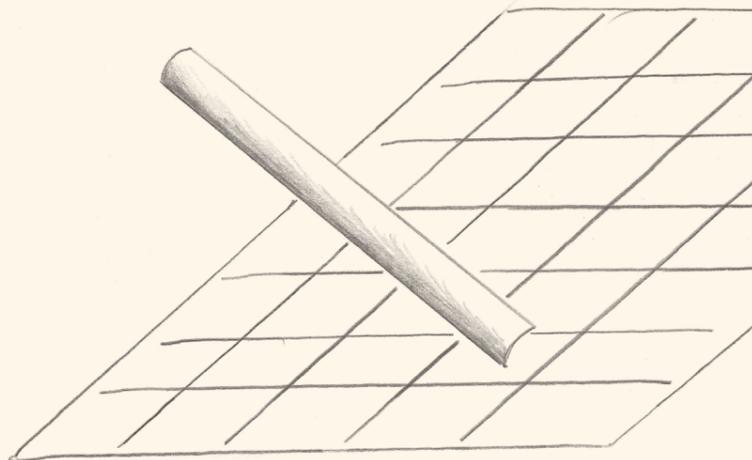
太古の状態での旅を再現するため、砂鉄から道具を作り、舟をつくった関野吉晴による武蔵野美術大学でのゼミの記録。タイトル通り、素材や器から学生たちの手で作り、最終的にカレーライスを調理、食するまでのドキュメント。ゼロからではなく、一からというのが重要なポイントで、われわれは生物の種までは作り出すことは出来ない。農家から稲をもらい、ダチョウのひなを譲り受け、人の土地を借り、耕し飼育する。一から作ることで、われわれが資本主義圏外の営みや生物たちと関連して生きることがよく分かる一冊。ホロホロ鳥を学生たちが居るシーンはある種儀式的で、最後まで並走した読者の胸を打つだろう。自分で作ることで見落としていたことがリアリティを持って眼前に現れるセルフビルドの体験。

LIXIL BOOKLET 『幕末の探検家 松浦武四郎と一畳敷』

2010、LIXIL出版

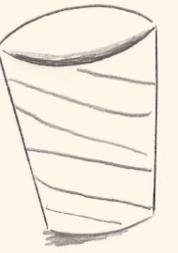
6

江戸期に蝦夷地を探索、測量し、北海道の命名者となった松浦武四郎は日本中を旅しながら、各地の民俗資料を記録し、数多くの著作を刊行した。各地でさまざまなネットワークを持つ武四郎の集大成ともいえるのが、たった一畳の書齋「一畳敷」。伊勢神宮の遷宮で出た木材を廊下の柱に、高台寺が火災に見舞われた際に出た古材を軒桁にと、コラーージュワークのようにして用いられた木材の数は91にもものぼるといふ。さらにはそれを「木片勸進」という本にまとめて出版までしてしまうというあたりは好事の極み。自分自身で作るといふ意味とはまたことなる、自分自身を小宇宙として作り上げるという意味でのセルフビルド。晩年、歩けなくなっても一畳敷に居ながらにしてマインドで旅をしたのであろう。現在は移築され国際基督教大学の敷地内にて保管されている。



自邸を「世田谷村」と名付け、セルフビルドした建築家石山修武による、セルフビルド建築ガイドブック。「ひろしまハウス」や「バー・トタン」、「川合邸」などさまざまな魅力的な物件が写真とともに紹介されるが、その動機や発端が千差万別なのが面白い。本書の前書きには、セルフビルド的存在として、建築の分野を超えたさまざまな作家たちの名が挙げられる。ウィリアム・モリス、レヴィ・ストロース、バックミンスター・フラ、鴨長明、松浦武四郎。つまり本書自体がかの有名な「WHOLE EARTH CATALOG」のように、「セルフビルド的な考え方を識るためのブックガイドになっているのだ。ただ自分で家を建てるというだけの話ではない。経済を、環境を、資本主義や消費生活を見直すためのトレーニングがセルフビルドなのである。

『セルフビルドの世界 家やまちは自分で作る』



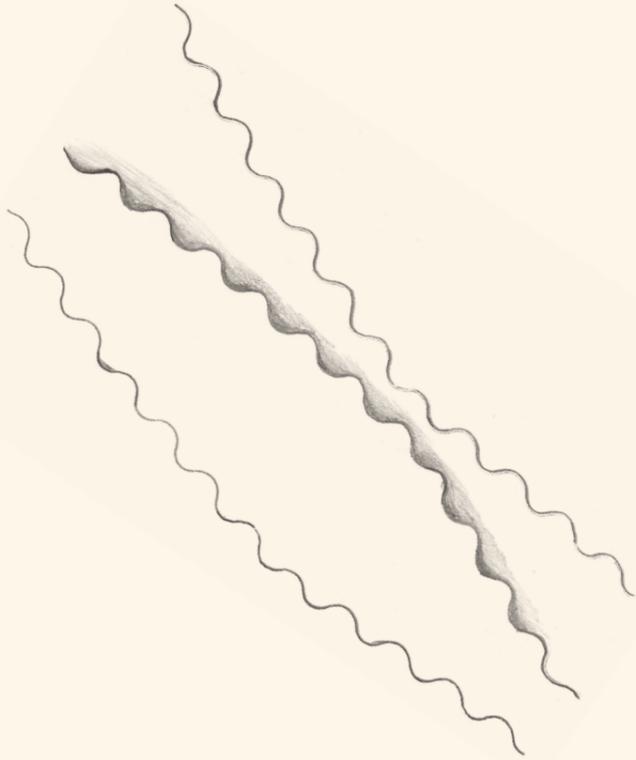
7

(ちくま文庫)

石山修武文、中里和人 写真、2017、筑摩書房

8 『コーネルの箱』

チャールズ・シミック 著、柴田元幸 訳、2003、文藝春秋



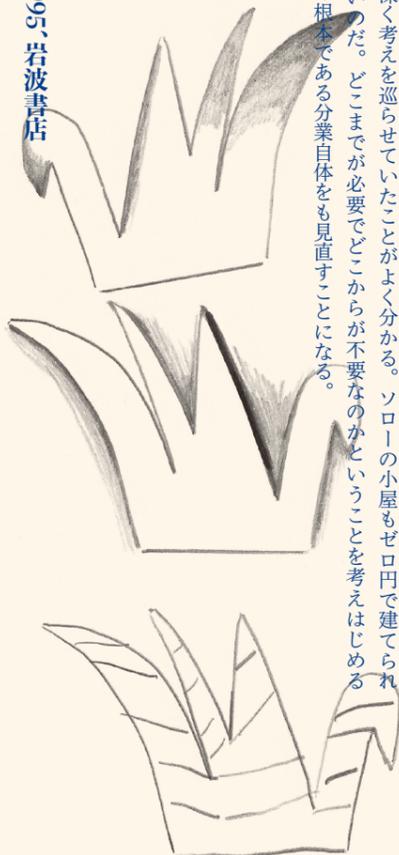
シュールレアリズムとセルフビルドは親しい関係である。シュールレアリズムの手法の一つであるコラーージュやイメージの接合はプリコラーージュ的であるし、路上の石ころを拾い集めてたつたひとりで奇妙な理想宮殿を作り続けた郵便配達夫シュヴァルに、アンドレ・ブルトンがインスピレーションを受けている。シュールリアリストたちに刺激されたニューヨーク出身のアーティスト、ジョゼフ・コーネルは、自宅の周辺を歩き回り、ダイムストアや古書店、時には打ち捨てられたものを拾い集め、それらを素材として箱の中に小宇宙を作った。「Dime-Store Alchemy」(ダイムストアの錬金術師)という原題の本書は、作家によるコーネルへのオマージュ的な詩的散文とコーネル作品の組み合わせ。セルフビルドとは孤独を生きることでもある。

『森の生活(上)(下)』

(岩波文庫) H・D・ソロー 著、飯田実訳、1995、岩波書店

9.10

「この分業というやつは、いったいどこまでいけば終わるのだろうか？それは結局、何の役に立つことになるのか？もちろん、ほかのひとも私のかわりにものを考えてくれるかもしれないが、だからといって、私が自分でものを考えるのをやめたほうがいいことにはならないだろう」(上巻p87)
なぜソローが湖畔に小屋を立てて一時期にせよ隠遁生活を送ったのか。自然の中に身を置いて思索にふけり、自分自身を見つめ直すという漠然としたものでなく、本書を読めば時間と経済について深く考えを巡らせていたことがよく分かる。ソローの小屋もゼロ円で建てられたものではないのだ。どこまでが必要でどこからが不要なのかというところを考えると、資本主義の根本である分業自体をも見直すことになる。



11

『発酵文化人類学 微生物から見た社会のカタチ』

小倉ヒラク 著、2017、木楽舎

文化人類学を学び、自ら「発酵デザイナー」を名乗る著者による一風変わった発酵文化論。レヴィ・ストロースの提唱した、プリコラーージュという概念や、マリノフスキーの贈与論を発酵食に重ね綴った異色の書。誰でも簡単に自分で保存食を作れるというDIY感覚と、テロワール、つまり地域性によって生まれてくるものが異なるという非グローバルな成り立ち、そして自然現象の力を借り出来合いの設計図とは異なるものができるというあたりがセルフビルド的である。発酵というミクロの世界と、著者と地方の造り手たちという等身大の世界、そして社会というマクロな世界、3つのレイヤーが重なり合う。循環型の「冷たい社会」の重要性を説く姿勢は、バックミンスター・フラ、レヴィ・ストロース、ソロー「セルフビルド」キーマンたちにリンクするはず。

